第4回 小樽港長期構想検討委員会・幹事会　意見概要

分　野	主　　要　　意　　見
総合的視点	これまでの委員会、幹事会での意見が反映され、目指すべき姿が具体的になり、現状を踏まえた上で課題が抽出され、プロジェクトに繋がっている。
	今後はこの構想を実現していくことに舵を切って力を入れて欲しい。限られた予算など色々なハードルがあると思うが、実現に向け知恵を絞り進めてもらいたい。また、長期的な施策などは次の世代にも引き継いでいく工夫が必要。
	この構想を実現するために、港湾計画の改訂を行い、事業を着実に進めてもらいたい。
	この構想の基本目標、将来プロジェクトの実現に向けて官民一体となって取組む必要がある。
	土地利用の効率化や再編は、ハードルが高い取組であるが、一つずつチャレンジしてほしい。
	地球環境に熱心な地域としての北海道、という視点を忘れずに構想を進めてもらいたい。
	景観や災害に強い優位性のほか、新幹線や高規格道路が整備されると交通アクセスが強化される。こういった点を売りに構想を進め発展に繋げてほしい。
	実施に際しては、まちづくりと連携しながら、港・水辺の魅力を十分に発揮できるよう活性化を図り、市民や多様な人々が参加する、まちづくりとみなとが連携する新しいスタイルがここから生まれるのではないかという期待をしている。
	この構想が進み、近い将来、市民が暮らしの安心を実感でき、街への愛着がより深まることを望んでいる。
	構想の実現には市民の協力が重要である。歴史を検証し、ストーリー性を設けながら、港の将来像を情報発信して進めてもらいたい。
	この構想をどう実行していくかが重要で、どこを優先的に進めるのか実行プランを作り、進めて欲しい。
物流・産業	少子高齢化による人手不足、ほかにも市の財政など制約が増えてくる中で、石狩湾新港との連携や役割分担を図り、物流機能の効率化やAIの導入等により競争力を高める港づくりを進めてもらいたい。
	物流機能の整備・再配置により、中国やロシアなどの対岸だけでなくシベリア鉄道などで欧州と繋がる日本海側の拠点港として、ますます重要な港となることを期待する。
	小樽港の発展は歴史的にも貨物が支えてきた。これからも港の機能の維持・発展は貨物船がベースである。物流面でもハード・ソフト共に頑張ってもらいたい。
	貨物船の大型化が進んでいる。日本海側の穀物基地として、船舶大型化への対応を優先して進めてもらいたい。
観光・交流	豊かな自然を感じ取れる港湾都市の環境整備を進めるとともに、住みたいと思える魅力あるまちづくりを実現し、滞在型観光やクルーズ拠点として地位を確立してほしい。
	新型コロナウイルスの影響を見ると、観光は小樽経済を下支えしてきたのを感じる。港の開発は、時間もお金も掛かるが将来を見据え進めてもらいたい。
	港は市民や観光客と接点が薄かったが、新幹線が開通するまでの10年間で観光交流ゾーンの魅力を高め、観光の拠点として積極的に進めてもらいたい。
	クルーズ船が入る港で観光地に近いのは、小樽のメリットである。堺町通りや北運河など周辺を一体で繋げるポイントとなる第3号ふ頭は、現在官民で協力して賑わいの場とするため検討しているが、早急な整備をお願いしたい。
安全・安心	老朽化対策と防災機能の充実を期待している。
	高島地区の水産対応施設は老朽化が進んでいる。衛生管理型施設などの整備を着実に進めてもらいたい。
	地元の漁船や避難港の視点からも高島地区の静穏度の改善は必要。地方からの漁船の入港による経済効果もあり、早急に検討してほしい。